

延寶二年眞長寺由來書に左の如く載せたり。

就御尋申上候。

一、當寺之儀、三代以前住持、微妙院様御代に關東より當御地に罷越、其砌中村刑部を以申上、河原町近所に而御屋敷拜領仕、寺致建立候。然處に元和八年に、微妙院様稻荷御宮被爲成御建立、別當被仰付。右之通相違無御座候以上。

延寶二年七月三日

眞長寺祐判

寶 幢 寺

按ずるに、右河原町は、今云ふ古寺町をいへり。三州名跡誌に、泉寺町眞長寺の稻荷は、金澤城いまだ築城以前より林中にありしが、城普請の時分、假に稻荷橋の明地へ勧請せられ、其の後眞長寺の境内へ遷座御預けと成りたり。其の眞長寺は、古寺町近邊惣櫛川端今の富永權丞屋敷也と見え、三州志來因概覽附録には、元和八年眞長寺の境内へ遷座す。此の時眞長寺は、惣櫛端今の富永右近右衛門宅地にありといへり。按ずるに、眞長寺の此の地に造立せられしは慶長十五年にて、稻荷社造營は元和八年八月、泉野寺町へ移轉は寛永十六年也と、龜尾記にいへり。然れば、富永

氏の邸地と成りたるは、寛永十六年以後ならんか。

○富永勘解由左衛門邸跡

延寶の金澤圖に、富永小右衛門、富永二郎兵衛とありて、本末兩家並びあり。元祿六年の土帳に、富永權之助香林坊橋少し川下。富永次郎兵衛權之助隣。とありて、元は勘解由左衛門の一邸地をば、分地して兩邸と成りたるもの也。元祖勘解由左衛門某は、文祿二年長卿に奉仕し、家祿千五百石を賜はり、足輕頭、旗奉行を勤め、元和五年歿す。二代勘解由左衛門助盛、父の遺領千五百石を賜はり、馬廻頭、町奉行、寺社奉行を勤め、萬治二年致仕し、老名を休候と稱す。三男あり。長男小右衛門助清、父の家祿の内千四百石を賜はる。次男次郎兵衛助次は分知共三百石を賜はり、三男勘六某は分知共二百石を賜はる。小右衛門の長男權之助、父の家祿の内千石を賜はり、次男豐左衛門へ二百五十石を配分、四男造酒へ百五十石を配分せらる。權之助の長男右近、父家祿の内七百石を賜はり、次男權大夫、三男吟左衛門へ百五十石宛配分、數家に分れ、宗家は是より世々七百石を賜はりたり。按ずるに、香林坊橋下惣川端にて邸地を賜はり

たるは、二代勘解由左衛門の時にて、寛永十六年に稻荷眞長寺に泉野寺町へ移轉を命ぜられ、其の跡地をば賜はりたるものなり。

○富永氏傳話

舊傳に云ふ。元祖富永勘解由左衛門は、猪俣能登守の弟にて、一騎當千の勇士なりしが、當藩士と成り、邸地を金澤に賜はり、家作し居住しけるに、或年市中より出火し、次第に大火に及び、居室既に火難に罹らんとせしが、鬼形のもの顯れ居て、大笠を以て火を防ぎけるゆゑ、其の難を遁れたり。故に鬼をば家の守護神となし、毎年追儼の祝詞にも、此の家に限り禍はうち鬼はうちといひて、大豆打の儀式をなし、年頭には鬼と盃を取かはす儀式などありて、祖先以來家格の故事となしたりといへり。按ずるに、右金澤の大火といふは、寛永八年四月十四日の火災ならんか。此の火災は、犀川橋爪法船寺の門前より出火し、田井口及び淺野川金屋町まで焼失し、金澤の大火とす。古寺町小橋天神の由來記にも、寛永八年四月十四日の火災に社殿焼亡すとありて、此の天神は則ち富永氏居邸の近邊也。但し右火災

の頃は、いまだ富永氏の居地に眞長寺及び稻荷社のありし頃なれば、彼の火難を鬼の防ぎたるは、何れの地にての事ならんか。鬼の事は、寶曆九年四月十日の金澤大火の節、金澤城本丸に鬼形のもの、大笠を以て火を招き居たる体遙かに見え、遂に城中焼亡すと、加藤蘭山の私記に見えたり。

按ずるに、日本紀に、齊明天皇筑紫に行幸し給ひ、崩于朝倉宮。於朝倉山上有鬼、著大笠臨視袈裟。衆皆嗟怖。といふ事見られたれど、鬼といふものは、魔魅の類をいへるなるべしといへり。和名抄に、鬼魅類をば悉く擧げて註解すれども、今世人のいへる鬼形のものとは詳かならず。伊勢物語、今昔物語などに載せたる鬼てふものは、今いふげものにて、拾遺集に、おにこもれりといふはまことかとよめるものは戲言にて、其の實女を罵つていふなりといへり。又追儼の鬼は疫鬼をいへり。續日本紀に、慶雲三年十二月。天下諸國疫疾百姓多死。始作土牛大儼。と見え、臥雲日件錄に、文安四年十二月廿二日。明日立春故、及昏景、每室散煮豆。因唱鬼外禰内四字。蓋此方驅儼之様也。と見えれば、世俗節分の大豆打の祝詞に呼べる鬼はそと禰はうちといふ